

高成長系ビワマスの成長に関するモニタリング

田中 秀具・桑村邦彦・西村 哲也(滋賀県漁業協同組合連合会)

1. 研究目的

醒井養鱒場で、選抜育種により作出した高成長系ビワマスは、人為管理下で2歳までに平均体重1kgを超える成長の速さが特徴である。これを地域特産養殖魚とするべく平成17年度から養殖実用化研究を実施している。ここでは平成22年度の飼育群の成長に関するモニタリングについて報告する。

2. 研究方法

今年度飼育した高成長系ビワマスは、08群(15B、1+齢)と09群(15F、0+齢)である(略号の意味は、昨年度本報告に記載)。

毎年の飼育群は、1~2ヶ月に1回程度、1回につき50尾の被鱗体長を測定し、高成長という本品種の特徴をモニタリングした。

3. 研究結果と考察

高成長初代の養殖1号(6F)および、12F以降の体長の成長を比較して図1に示す。

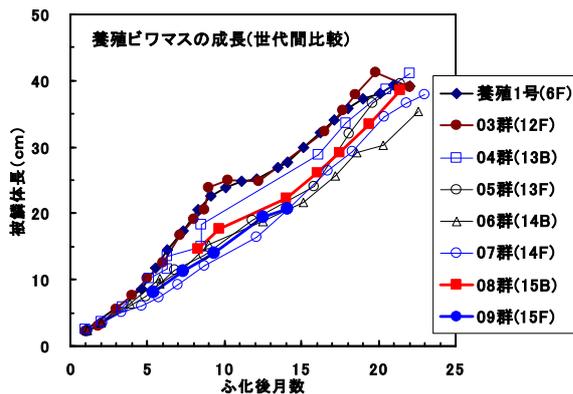


図1. 養殖ビワマスの体長の成長(世代間の比較)

大型魚飼育(1+)の08群は、22ヶ月齢では平均被鱗体長(以下、体長)38.5cmとなり、先代(06群:35.4cm)と先々代(04群:41.1cm)の中間の大きさに成長した。当歳魚飼育の09

群は、14ヶ月齢の平均体長が20.8cmで、先代(07群:20.5cm)、先々代(05群:21.5cm)の中間の成長を示した。

継代魚の成長過程を図1に示すが、この図に明らかなように、初代高成長群「養殖1号」(6F)や、本養殖事業化試験の初代となる03群(12F)と比べると、05群以降の成長は、1年目の成長が不良と、それを補うような2年目の高成長が特徴である。その結果2歳直前の成熟を迎える頃(22ヶ月齢)には、平均体長が40cm近くまで成長するものの、初代群等(06F、12F)には若干及ばない。今年度飼育の両群もこれらの飼育成長パターンの中にあり、この傾向は継続的におきているといえる。

なお、4事業者(1漁業協同組合、3養殖事業者)に対して、平成22年5月に、各3000尾の種苗(09群)を分譲し、試験養殖事業を開始したが、その成長は飼育水温が13~17℃と醒井養鱒場(12℃)より高い3事業者で、ここに示した当該における09群の成長を大きく上回っている(聞き取り情報、データ無し)。

4. 研究成果

①この様なモニタリングを続けることで、本系統のもつ特徴(本系統では高成長)が劣化していないかの他、今後、県内民間事業者への分養の時期判断、給餌量の調整等、飼育管理過程の適時的な助言が可能となる。

②4事業者における09群の飼育は、1箇所において注水停止事故による斃死があったものの、全体的には問題となるような魚病発生もなく、比較的順調に飼育され、上記のように高水温飼育水の事業者においては当該よりも大きく成長させており、今後の当該以上の大型化も期待できる。

* 所属：滋賀県漁業協同組合連合会醒井養鱒事業場